

幼児の理解と尊重

黒 木 一 男

幼児教育論 ②

入園率は年々上昇しています。宏壯な園舎は続々と建設され、各種の才能教育も幼児の幸福を招来するものとして実施されるなど、誠にはなやかな躍進？があるかと思えば、一方には風雪にたえた陋屋の中で、放任と一斉保育でその日を送っていると思われる幼稚園もあります。どちらにしても保育は行なわれてはいますが、幼児は真に理解され、尊重されているでしょうか。誠に古くさい問題を断片的にとり上げてみました。

昭和三十一年「幼稚園教育要領」によって保育内容が明示されて以来、年を追って保育の内容、指導法の研究が盛んとなり、その研究は細分化され、専門化されて幼児教育者に多大の便宜を与えています。このことは我が国の保育の前進のためにも大きな喜びです。現場の教師は、これら研究の成果、理論、方法などを手がかりとして、自己の担当している幼児の保育を十全なものとしなくてはなり

ません。ただ、現場の幼児の一人ひとりはずべて独自の存在ですから、研究された一般的理論・内容・方法を、そのまま借用して幼児に臨んだのでは、保育に成功するとは限りません。研究された理論・内容、方法をよく己のものとした上で、現実の幼児の実態にして、我が国教育の目標である個人の尊重、社会連帯性の育成による人間性の基礎形成としての保育にあたらねばならぬことは当然でしょう。幼児の実態に即するためには、先ず幼児は理解されねばなりません。

今日の保育の中には、幼児の理解、尊重よりも、幼児の指導の方に重点が置かれているのではないかと思われるふしぶしに出ています。指導はもちろん大事なことです。その前に幼児の理解尊重が先行しなくてはならぬと思います。言い古されたことながら、一人ひとりの幼児は真に尊重されているでしょうか。幼児には一人として同一性格、同一能力のものはいません。しかも幼児はすべて、よ

りよく生きる権利と、よりよく成長発達する権利を持っています。これらの権利は尊重されているでしょうか。十把一からげに引き廻されたり、個別的に詰め込まれたり或いは放任されたり保育では幼児は尊重されるどころか虐待されているとはいえないでしょうか。

個々の幼児を理解できなくても尊重することはできません。しかし理解することなしには幼児に即した保育は不可能ではないでしょうか。しかし一面、真に幼児を理解することは、神ならぬ人間にとっては、理論的にも現実的にも殆んど不可能でしょう。この不可能なことをしなくてはならぬのが保育者なのだと思います。不可能だからこそ少しでも理解しようと努力することが、せめても幼児に対して十分の保育をしてやれぬ教師の罪のつぐないになるのではないのでしょうか。次ぎに保育の形態を中心に、不可能ながらも幼児の理解の手がかりになればと二、三拾ってみましょう。

☆家庭訪問

原則的に考えますと、家庭で親の保護のもとでの幼児のありのままの姿に接することも幼児理解のための一つの必要なことだと思います。人間性の形成には、乳幼児期の人間関係の在り方が大きな影響を与えるものだと申します。

したがって入園前における家庭での幼児に接し、保護者のものの考え方、躰け方、家庭環境などを知ることが、幼児理解のための多くの糧が得られるのではないのでしょうか。

入園式がすみ、保育が始まると、教師にとって最も多忙で心身共に疲労する時期を迎えます。大部分の新入園児が一応どうにか手に入って落ち着き始めた頃、四月の末か五月の上旬から家庭訪問をする幼稚園がごぞいます。

このやり方は、先ず保育して幼児を理解するという進み方を示しているのではないのでしょうか。幼児の理解を、保育に先行させたいとの理論からすれば、入園式以前に第一回家庭訪問が必要だということにはならないでしょうか。

幼児を保育してみても、或る程度幼児を理解しての家庭訪問が有効だとの考え方に反対しているではありません。入園式後の訪問は、それとして十分に価値があります。入園式後家庭訪問するから入園前の訪問は不要であるとの考え方には、なにか筋が通らぬものがあると思います。幼児も知らぬのに入園前に家庭訪問しても話題に困るとの正直な話もありますが、知らぬからこそ訪問であり、訪問についての準備をすれば、何にも困れることはないと思います。いろいろ理由はあげられませんが、卒園式がすみ、新入園児の編制、受け入れ準備、保育計画の整備、学級担任の決定、とくに教師に異動があれば、なおさら仕事が山積していることから、現実の問題としては入園前の訪問はできかねる。或いは新学期の全教師が揃ってから一斉に実施する方が仕事のけじめがつくとの考えもあるようです。なるほどそれもその通りでしょうが、全員揃っていっしょにやらなくてはならぬように思いこまないで、現在員だけで各

自のクラスをすませておいてよいのではないだろうか。新任者のクラスは着任されてから各自していただければよいのではないだろうか。園や教師の都合から、家庭訪問をするということになれば、園や教師は幼児のことを考える前に、自分のことを考えたということになりますまいか。園のために幼児がいるのではなく、幼児のために幼稚園があり、保育のために幼児を保育するのではなく、あくまで幼児のために保育するのであれば、幼児のよりよき理解尊重のため、園や教師は真剣に努力せねばならぬのではないだろうか。

(幼児教育者の待遇か、幼児のことを考える前に、自分のことを考えたくなる現状であることは、別の分野で真剣に考えねばならぬ問題だと思います。)

☆登園時の幼児との接触

幼児と教師との一対一の温い人間関係を通して幼児の理解と、個々の幼児に即した保育の時間とを十分に持ちたいものです。これらの時間はいつ持てるでしょう。園や教師の事情、園長のものの考え方によって千差万別とは思いますが、幼児の登園時などは適当な時間ではないでしょうか。

教師は幼児より早く出勤して環境を整えて待っています。(環境は前日すでに整えられたとしても、一夜の中によりよいアイデアが生まれぬとも限りませんから。)

一人で登園する幼児、お友だち、仲間と三三五五来る幼児、或いは保護者といっしょに来る園児もありましょう。その時朝の視診が

行なわれるのは当然ですが、一人ひとり接触しながら昨日のような幼児なのか、何か変化があっているのかを見てとらねばなりません。昨日の園での活動状態と、本日の指導計画とをにらみ合わせて、ほめて上げねばならぬ子、指導しておかねばならぬ子、励ましておかねばならぬ子、子どもの言い分をきいてやらねばならぬ子など一人ひとり交すことばもちがうはずだと思います。園での一日の生活を始めるための基本的最低限の基礎づくりがいていねいに毎日行なわれているでしょうか。堅固な基礎の上に着実な保育が積み上げられるのだと思います。

私の園にはスクールバスがあるというのでしたら、極端にいえば多くの幼児が一時にハシャギながらバスからはじき出されて来て、先生お早う、先生お早うではないでしょうか。スクールバスを使用せねばならぬ園であれば、幼児と担任教師との接触時間をいっどこで生み出すかを真剣に考えねばなりません。スクールバスは、通園上は安全でしょう。安全は教育の最大条件ですから、スクールバス使用以外に全く方法がなければそれでも結構ですが万一事故が起った時には、多数の幼児が一時に事故に巻き込まれる危険性があります。この間の考慮には十全を期せねばなりません。

幼児が自分の足で、判断し、社会に接し自然に接しながら通園することによって、自己の能力を多方面に伸し、社会生活の第一歩を学びとるのでから、原則的には自分の足で通えることにこしたことはありますまい。交通地獄の大都市、広大な通園距離をもつ地方

では、スクールバスの必要な園もありましょう。この場合は、園の責任においてスクールバスを用意するというのではなく、地域社会において責任をとってほしいと思います。幼児は地域社会の子どもですから。

スクールバスから一斉にとび降りて来るから個別指導の時間ほとりにくく十把一からげに応待しているというのは、幼児の生命は尊重できたが理解への努力には手抜かりがあるということになりましょう。

個々の幼児の理解は、自由保育や一斉保育の中でも勿論できません。しかしその時の幼児は、自由保育、一斉保育という計画され構成された場における幼児です。最大限の自由が与えられ、或る意味では最大限に自己表現ができる自由遊びの開始時における幼児の理解は、案外重視されてないのではないかと申したいのです。もちろん計画された保育の中での理解が次ぎの保育の糧になるのは当然です。相互媒介的・循環的に理解と保育が積み上げられることはいうまでもありません。それでもなお、登園時における幼児の理解への努力の重要性を強調したいのです。

今日の幼児を理解するために、前日の幼児の理解、それまでの幼児の理解が役立つのですから、毎日毎日の幼児の記録を整えておいて、登園時の自由遊び、及び日程に組まれた他の一般の自由遊びの中に生かしたいものだと思います。(一般の自由遊びについては略します)

☆自由保育(個別指導)

自由保育とは十分に検討された保育計画のもとで、個々の幼児に十分の自由を与え、できるだけ干渉を少なくし、脅かされることのない雰囲気と整えられた環境の中で、伸び伸びと自己の可能性を發揮し、生き生きと自由に、個人として或いはグループの一員として活動する中に、幼児に即して個別的指導が行なわれる保育の形態であることは御承知の通りです。

この自由保育の中では、幼児は、教師と一対一で接している時、或いは一斉保育中とは異なった姿を見せてくれます。

そのためには、園全体の環境を整えておくことが、幼児理解の一つの要件となります。一般に保育室の整備についてはクラスの担任が努力していられますが、リズム室・園庭となるとどうでしょうか。リズム室・園庭の整備に教師が頭を向けると、ああもしてほしい、こうもしてほしいと経費のかさむ要求になりがちで、どうかすると保育室以外に眼を向けることを好まぬ園もあるとすれば、環境整備についての教師の努力は消極的となるのではないのでしょうか。環境を整えて幼児の成長発達を助長するのが保育の目的であるからには、環境の整備についても情熱を燃やしてほしいものです。

幼児の自主性、自発性を尊重するといっても、幼児の興味を誘う環境が先ず必要となってまいります。幼児を尊重するといっても幼児の興味は必ずしも望ましい方向のみに向かうとは限りません。周囲に迷惑をかけたり、生命が危険にひんしない限りは最少限の指導

を与えた後は、余裕をもって幼児を見守り最少必要量だけの助力をするだけの覚悟が必要ではないでしょうか。誤りを通して学習は成立することを今一度思い出してほしいと思います。えてして熱心な教師の中には、不要の干渉に乗り出し、幼児の真摯な学習を妨害する教師も見受けられます。放任にならず、正しい自由保育が行なわれ個々の幼児の安定した中にも生き生きした活動を尊重できる自由保育をもっと重視したらと思います。そのためには教師の能力が最も要求されますが、それに劣らず環境の整備と、園長並びに保護者の自由保育に関する理解が必要だということになりましょう。

☆一斉保育（集団指導）

教師の指導に重点がおかれる一斉保育・集団指導は、幼児に個人的諸能力、基本的技術を習得させる指導と共に、家庭生活では身につけることが殆んど不可能な自由と平等な協同生活・集団生活の在り方などを身につけさせるためにも、なくてはならぬ保育の形態だと思えます。

教師が中心となつて、幼児の身につけさせたいものを、一斉に指導するので、一般的には同一目標に向かって同一活動をするよう幼児に望むのは当然でしょう。しかし、幼児の能力にも個人差は大きいものがありますから、画一的な同一成果を望むことは好ましくありません。例えば製作の場合でも、でき上る子、でき上らない子がいるのは当然です。でき上らぬ子には教師が大急ぎで手伝って完成させ、家へのお土産にするというやり方は如何なものでしょう。

う。保護者には幼児の真の能力を理解せず、幼児には依頼心を起こさせ、ともすれば教師をお手伝いさんと同一視する根性を培わせることにもならないでしょうか。

一斉保育を通して私たちは幼児を理解できますが、この場合の理解は、他の幼児との比較を通しての理解になり易いのです。

私が申し上げたいのは、個人の尊厳をたてまえとした個々の幼児の理解は、他との比較による理解だけでは不十分であるということです。教えこむことに熱中して他と比べて上手とか下手とか、良いとか悪いとかという評価だけに終らず、何故その幼児の現実がそんなのか、どのように保育することが、その幼児の独自性に即して、よりよい成長と発達を真に助長し、個性豊かな、しかも社会の改善、文化の進展に奉仕できる社会人・日本人に育成できるだろうかとの、個々の幼児の理解と指導の手がかりを、一斉保育の中でも見出してほしいということです。

一斉活動、グループ活動の中で、わがままをいわぬ、きまりや約束を守る、協力する、いたわり合う、奉仕の精神などなどの芽ばえを身につけさせねばなりません。人間は一人で生活することはできません。社会を構成しその中でのみ生活できるのですから、社会生活に必要なものを、家庭教育では身につけにくいものを一歩一歩身につけるよう指導が行なわれねばならぬと思います。

教師の指導が強く前面に打ち出されると、どうしても保育計画を幼児に押しつけることになり、幼児を目標に引きずり易くなりま

す。幼児のための保育計画が、保育計画表現のための幼児にならぬよう、あくまでも幼児の現実を尊重し幼児の自由を大切にしながらとした幼児の活動が進展されるような一斉保育・集団指導でありたいと念じます。

☆全員保育（全体訓練）

指導の形態からいえば一斉保育・集団指導の中に含まれるものです。幼稚園の全園児を一斉に保育することです。小学校式の表現をかりれば全体訓練の形態にあたるものです。

全園児がいっしょになって、上手にできぬは別として、形式的には同一保育を受けるものです。方法にはいろいろありましようが、初歩の段階では各学級ごとに担任教師を中心として集団を組み、同一指導者の指導のもとに一斉に活動をします。次第に上達するにつれて数学級が一集団となり、最終の段階に近づくに従って、全園児が学級の枠をはずして一つの集団となって活動をいたします。

自分の学級では担任教師の指示には従えても、右のような集団指導の形態になると遊具に逃避したり、全然集団に参加できぬ幼児も見受けられます。自由遊び、自由保育、一斉保育の時には見受けられぬ幼児のいろいろな姿を見出すことがあります。大集団に参加できぬのは、それ相応の理由があるはずで、困った子ではなく救われねばならぬ、愛と理解の手を差しのべてやらねばならぬ子どもなのです。これらの参加できない幼児・集団のきまりを積極的に破ろうとする幼児の存在によって、お互い教師に自己を高め、深める機

会を与えてくれるありがたい存在だと思います。自分の担任の先生でなくても、どの先生の指導でも快く受ける、大集団の中にもきまりを守って楽しく活動できるという経験は、他の保育形態では十分にはできかねます。

個々の幼児を大事にすればする程、社会的集団的行動能力を学びとらせねばなりません。このような全体的保育は、園の諸行事を通して身につけさせるのは当然ですが、できれば、毎日少しずつ、一時に多くの要求を出さず、楽しい全員での遊び活動を用意すれば実施も簡単ですし、効果も上げやすいものです。この指導の場合も他の形態の保育同様、教師の指導は最少限に留め、最大限の自由を幼児に与えたいものです。初歩の段階では混乱に陥って楽しい遊びはできなくても、この混乱を通してこそ、集団のきまりの必要性を、次第に幼児にわからせてゆく努力が、幼児の自主性を培うことになると思います。この考え方に對しては、初めこそ大事だとの反論があります。最初が大切であることはもちろんですが、なぜ参加できぬかの理解をあと廻しにして、最初から大集団の鑄型に押しこむというやり方は、幼児の自由を尊重したとは申せません。ただ幼児の勝手な行動が、他に大きな迷惑をかけるとか、或いは本人にとつて非衛生的であったり危険をもたらす場合は、その行動が許されぬのは当然です。集団の行動様式を身につけるといっても、小さいおとなとしてではなく、あくまで幼児らしさがなくてはならぬと思います。